

TOP RUNNER

岐阜県中津川市

株式会社中島工務店

<http://www.npsg.co.jp/>

代表取締役 中島 紀于 氏



岐阜県・下呂温泉の東、木曾川の源流に位置する中津川市加子母(旧恵那郡加子母村)。伊勢神宮の式年遷宮用のヒノキの育成を担う「神宮備林」を有し、豊かな自然に恵まれた東濃ひのきの里・加子母。およそ3500人が暮らすこの地域では、“都会の人に第2のふるさとを”をテーマに、村の材料と村の職人の手で、都会で家づくりをする「産直住宅」に村ぐるみで取り組んでいる。その中心を担う中島工務店の中島社長にお話を伺った。

加子母の未来を想うところを 都会に届ける家づくり

村の将来を賭けた 産直住宅への挑戦

構造材はもちろん、造作材も、建前までに必要なものはすべて加子母で加工して持っていく。材料だけでなく、建てるのも加子母からやって来た大工、職人。それが加子母の産直住宅である。村ぐるみでこのような試みを始めたのは、今から30年近く前の昭和55年頃のことだという。

発案者は当時の村長・丹羽太郎氏だった。総面積の95%が山林で、9割の世帯が森林所有者という加子母では、戦後復興で住宅需要が盛んだった頃には、木を伐って市場に出せば売れるという良い時代を経験していた。だが、大手ハウスメーカーが台頭してきた昭和40年代以降、住宅にヒノキを使ってもらえないという事態を迎えることとなった。林業の衰退は、すなわち村の衰退である。危機感を抱いた丹羽氏が考えたのが、「このまま市場にヒノキの柱を売っていたのでは、将来的に山がやっていけなくなる。東京や大阪、名古屋へ行って家を建てよう」ということだった。産直住宅の始まりである。そして、丹羽氏がその実現のために白羽の矢を立てたのが、中島社長だった。

中島社長は、高校の土木科を卒業後、自ら創業した中島工務店でおもに土木工事と治山工事を行っていた。丹羽氏から産直住宅の展開を託されたものの、土木一筋だった中島社長にとって、住宅建築は未知

の分野だった。だが、村の将来を考えたとき、「林道をつけて治山工事をやれば、それで山林が未来永劫、そのまま健全に保全されるわけではない。山林経営をしなければならぬ」と気付かされた。丹羽氏と中島社長の林業の村・加子母への想いが、家づくりとして動き始めた。

『大工、出前します』

加子母の産直住宅という取り組みが広く知られるようになったきっかけは、テレビ番組で紹介されたことだった。NHK名古屋放送局に『大工、出前します』として取り上げられ、好評を得た。その後、全国放送で何度か紹介されると、各地から依頼が舞い込んだ。関東に最初に進出したのは、昭和59年。茨城県つくば市のニュータウンで建売に挑戦した。このときの経験が、中島社長にプレカット工場の整備を決意させた。「これから都会で本格的に展開していくためには、プレカットでなければならない」中島社長はそう考えたが、周囲からは強く反対された。当時は、木を刻んで大工が墨付けをする、



施工例。数寄屋風の外観が美しい。



水と緑の勉強会。背景は安藤忠雄設計の“木造打ち放し”ふれあいコミュニティーセンター。

それが産直住宅だという考えが根強かった。だが、産直住宅の将来を見据えた中島社長の目には、プレカットの必要性はあきらめなかった。村長の応援も得て、平成元年、プレカット工場を稼働させた。

関西に進出したきっかけは、平成7年の阪神淡路大震災だった。被災地の惨状をテレビで見ると「木を売るより、救援に行かなければ」と感じた中島社長は、スタッフとともに神戸に入った。自社の現場事務所用のユニットハウスを持ち込んで住宅として提供し、ボランティアで壊れた住宅の修繕をした。この取り組みが評判となり、家を建ててほしいという依頼が集まったことから、神戸の総合展示場への出展を決めた。「当時は、地震で壊れたのは木造在来工法の住宅だとされ、ハウスメーカーの鉄骨の住宅がもてはやされていました。確かに木造の古い建物は壊れましたが、それは木造が地震に弱いためではないのです。それを証明したいという気持ちもありました」そんな中島社長の想いも手伝って、当初は予定していなかった関西での本格的な事業展開が始まった。

現在、中島工務店は、東京支店を中心とした関東地域、本社を中心とした東海地域、神戸支店を中心とした関西地域で、年間新築で50棟ほどを施工している。

口癖は「加子母へお越してください」

質の良い材料と職人の技を都会に直送する、そんな産直住宅の展開と同時に中島社長が力を入れるのが、都会の人と加子母の交流である。都会の人に山林の大切さを伝えるためには、送り出すだけでなく、木のふるさと・加子母に招くことが大切だと考えている。



毎年1回、夏に開催される“東濃ひのきの家ふるさとまつり”。その前年1年間に中島工務店で建築したお施主様を招待して行われる。記念植樹や加子母の木造建築物の見学のほか、トマト畑でトマトをまるかじりしたり、魚釣りをして串焼きにしたり…。1泊2日で加子母の自然を満喫できるプログラムとなっている。我が家のふるさとを訪問したお施主様の顔は、皆、喜びに溢れている。

春と秋には“水と緑の勉強会”を開く。住宅建築を考えている都会の人を、毎回50名ほど招待する。1泊2日で大黒柱の伐採見学や神宮備林、製材工場・プレカット工場などの見学、モデルハウスやショールームも訪れて、中島工務店の家づくりのすべてを知ることができる。約40名のスタッフが3ヵ月を費やして準備する、大切なイベントである。「伐採から、製材、加工、建築までの流れが加子母で完結していることをお客様に実感していただき、ロマンを感じていただきたい」それが、この勉強会を支えるスタッフ皆の願いである。

そして、気候がよい5月～10月にかけて年4回開催されるのが“かしも山歩倶楽部”である。約10kmの木曾越林道を歩きながら加子母の美しい新緑や紅葉を堪能し、山菜てんぷらや夏野菜の網焼きなど、地元の味を楽しむ。歩きながら、山の話がたくさんする。「この林道を造るまでは、下の里から3時間くらい歩いて来ていました」「苗木と道具箱を背負って歩いてきて、植林をします。それから下草刈りを何年もして、雑草の中からヒノキが顔を出すまでにどれくらいかかると思いませんか」そんな話をしていると、特に子どもたちは不思議そうな顔をして

聞いているようだ。だが、いろいろ話すうちに、だんだんと山のこと、木のことが出てくるのだという。都会の人300名ほどが会員となっており、多いときには100名が集まる。村の中には、一般の人が製材品を購入できる「木のなんでも市場」や地元のとれたて野菜等がずらりと並ぶ「かしも産直市」など、村の文化と産業を伝える施設がいくつもある。それらはすべて、中島社長が中心となってつくってきた。「加子母へお越してください」が口癖の中島社長。都会の人と加子母が交流する機会をいつも考えている。

木のやさしさに包まれた村の建物たち

林業の村・加子母を想う中島社長は、村の公共建築物を木造にすることにも取り組んだ。加子母小学校は半円形の木造建築で、木のやさしい香りが子どもたちを包み込んでいる。給食センター「食と文化の館」や、研修交流施設「ふれあいのやかたかしも」も、すべて地元の木で建てた。老人と子どものための施設「ふれあいコミュニティーセンター」は、建築家・安藤忠雄氏設計の“木造打ち放し”である。



加子母小学校

また、古い木造建築を後世に遺すことにも力を入れる。明治27年築の地芝居小屋「明治座」の保存に協力しているほか、築後117年を経た古い家屋の建て替えを請け負った際には、その家屋を移築して中島工務店のゲストハウス「牧戸山荘」として再生した。いずれも、当時の人々の暮らしが偲ばれる、趣ある建物である。加子母を訪れた人は、これらの壮大な木造建築物をいつでも見学することができる。

“Nakashima Public Shop”
がつなぐ心

東濃ひのきは、年輪が細かくしっかりと目が詰まっており、それゆえ、卓越した強さとねばり、耐久性・耐水性を持つ。中島工務店のつくる住宅は、このヒノキの特性を存分に生かすことにこだわる。村の職人に引き継がれてきた技が、木を活かす精度の高い施工を実現する。「2世代、3世代がリフォームせずに住み継いでいけるような家でなければならない」中島社長のそんなこだわりが、木を美しく見せるとともに、しっかりとつくられた住宅となって各地に届けられている。

木材も、瓦も、タイルも、土壁もみんな加子母から都会へ持って行く。同時に、大工はもちろん、板金、瓦、左官などの職人たちも都会へ届ける。そして、木を想い、村を想い、豊かな自然を次の世代に伝える心を都会の人たちと分かち合う。それが中島工務店の家づくりだ。中島工務店で家を建てる人たちは、紹介がきっかけであることが多い。それは、中島工務店の家づくりへの志を様々な機会を通じて受け取った都会の人たちが、その想いを周囲に伝えていくからだ。



かしも産直市でよもぎ大福を売る平野屋さん。

1 ……施工事例外観 2 ……施工事例内観



明治27年築の地芝居小屋「明治座」

「棟数をどんどん増やしたいとは思いません。それよりも、農業と林業しかないこの地域で、どこまでやっていけるか挑んでいきたい。この地で生まれ育ち、働いている人たちにどれだけやりがいのある仕事をしていただけるか、それが私の使命です」そう語る中島社長の周りには、いつも村のみんなの笑顔がある。

中島工務店のユニフォームの胸の部分には“NPS”の文字が刺繍されている。“NPS：Nakashima Public Shop”中島社長が高校時代に名付けた、中島工務店の名前である。工務店の「工」と「公」をかけて、「みんなで働く店」という想いを込めた。その名の通り、中島工務店は加子母の文化と暮らしを繋ぎ、都会の人と加子母をつなぐあたたかな結び目となった。

5月、中島工務店の新しいモデルハウスが誕生する。“環境共棲の家TERRA”と名付けられたその家のテーマは「地球に還る素材で造る、次世代への贈りもの」。中島工務店は、いつも大切にしたい何かをつなぎ、その想いを誰かに贈り続けることで、その輪を拡げていく。



新モデルハウス“環境共棲の家TERRA”にて、杉の床板(40mm)を張る岩木忠彦棟梁。(撮影：中島紀于氏)

The collage features two main items: a flyer for the '水と緑の勉強会 2008春' (Water and Green Symposium Spring 2008) held on April 26-27, and a brochure for the '環境共棲の家 TERRA' (Environmentally Co-habiting Home TERRA). The brochure shows a modern house and interior design, with text indicating it is located in 'ふれ愛タウン 美濃加茂中部台' (Fureai Town Minokamo Nakamichi) and is 'OPEN' in Spring 2020. The company name '株中島工務店' (Nakashima Kogyo Co., Ltd.) is visible at the bottom.

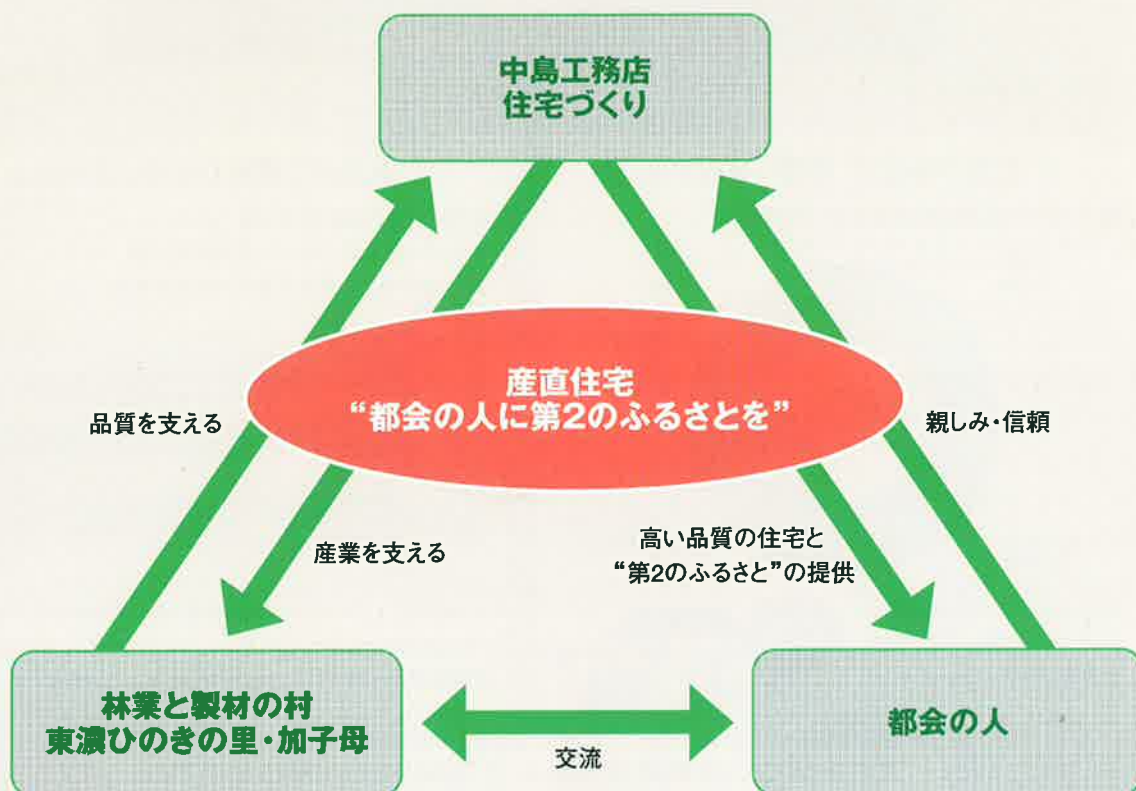
▶▶ 地域と一体となった住宅会社が、産業を守り、信頼を勝ち得る。

中島工務店様が「産直住宅」を通じて実現しようとしているものは、地域産業の活性化です。住宅づくりには、多くの材料と人、技術が必要です。昔から、それを担うのが地域の人々でした。中島工務店様ではその材料と人材、技術を都会に届けることで、村の生活基盤を支えています。同時に、地域に伝わる技術を守ることが、中島工務店の住宅の高い品質にもつながっており、まさに地域と一体となった

住宅会社なのです。地元の材料や職人を活用することで地域経済に貢献する住宅会社や行事等の運営を担って地域社会へのお役立ちを果たす住宅会社など、地場住宅会社の中には地域社会と密接な関係を築いているケースが珍しくありません。

中島工務店様のケースは、住宅会社が起点となって村全体の活性化に成功している先進的な事例だといえるのではないのでしょうか。

■ 株式会社中島工務店様の場合



地域に密着し、地域に貢献する考え方や取り組みが村のみならず、都会のお客様からの信頼の獲得にもつながっているのです。